

傾城阿波鳴門

六

八景 順禮歌の段

〔解題〕 明和五年六月一日から竹本座興行。作者は近松半二・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛。近松の「夕霧阿波鳴門」を翻案して、姫路の城主榊原政岑が吉原の遊女高尾（世にいふ榊原高尾）を身請した事件（寛保元年落着）を取合せて、阿波の徳島の玉木家のお家騒動として脚色したものである。その大筋は次のやうである。玉木家の若殿衛門之助が吉原の傾城高尾に溺れてゐるに乗じて悪臣小野田郡兵衛は蛇河の團八を手先として家老櫻井主膳の預る主家の重寶國次の刀を窃取して、その科で主膳を斥けて主家横領を企てる。主膳の舊臣十郎兵衛は、その妻お弓と共に刀の詮議のために心ならずも盗賊の仲間に入つて、銀十郎と變名して大

阪玉造に住む。一方に於て京室町の藤屋伊左衛門も主膳に恩義ある身故、若殿の放蕩の身代りに立たうとする。併し伊左衛門は吉田屋の夕霧に馴染み、その身受金才覚に窮して居る。十郎兵衛がその調達をする。尤もその金は伊左衛門が許嫁の大坂今橋筋粹屋の娘お辻に送つた五百兩の結納金を十郎兵衛夫婦が共謀でかたり取つたのであつた。尙又伊左衛門は武太六といふ無頼漢から借りた五十兩の督促を受けて窮地に陥つて居るを救はうとして十郎兵衛は苦心して居る矢先、順禮の女の子が金を持つて居ると知つて我が家へ伴ひ歸つて金を奪はうとしたはづみで思はずも殺した。それは國に残した娘のおつるで自分の留守に尋ねて來たが母が名のらずに別れたのだとお弓から話されて、二人は悲歎にくれた。(この條がこゝに收めた一段)その後十郎兵衛は高尾の助を借りて郡兵衛から國次の刀を奪ひ返して歸參を許され、伊左衛門はお辻を本妻、夕霧を妾に目出たく大團圓。

十郎兵衛のモデルは、阿波板野郡別宮浦の庄屋で他國からの積入米を横領した科で元禄十一年處刑された者であるといふが、どうであらうか。それは兎に角、本曲に仕組まれたおつる殺しは「茜染野中隠井」(元文三)の長吉殺しの趣向を思はせるのみでなく、近松の歌舞伎狂言の傑作「傾城王生大念佛」(元禄十五年)の中巻で高遠民彌の家來彦六が主君の急を救ふ金がほしさに禿を殺して、あとでそれが自分の娘と知れて妻と共に歎き悲しむ場面によく似て居る。又お弓とおつるの邂逅の場面は重の井の子別れにも似通つて居る。いづれにしても親子の情愛がよく描かれて居ると思ふ。後にこの一段だけが屢々繰返されるのは當然である。

地よしあしを。フシ何と浪花の町はづれ。らぬ。フシ身の行く末ぞ是非もなき。つばかふのフシ武太六が。地蚤とり眼玉造に身を隠す阿波の十郎兵衛本名隠。ハルシ人の名を。神と呼べるゝ其神は。に暖簾押上げ。圓銀十郎内にか用があし。銀十郎と表は浪人内證は。人はそ。京の吉田の神帳に入つた神かや入らぬ。つて逢ひに來たと。地いふ聲聞いて女れとも白波の。オフシ夜のかせぎの道なのか。やばとも見えぬ悪すいほう。と。房立出で。圓ヲ、武太六様ようお出で。

久しう逢はぬがまあ御無事で。イヤコレお内儀。逢はぬの無事なのと地を打つたせりふぢやない。ならず者の伊左衛門に貸した金。爰の銀十郎が請合うて今日中に済ます筈。それで其金受取に來たのぢや。きり／＼逢はして下されと。地聲も辰巳の上り口。尻まくりして、フシ高あぐら。詞ヲ、そのやうに聲高に言はずと靜かに物を言はしやんせ。こちらの人は夜が更けたので今晝寝して居られます。何ぢや晝寝ぢや。夜が更けたとは。エ、聞えた。夜通しのてこつりかい。よい機嫌ぢやな。てこつる金があるなら貸した金戻していけと。地いふに女房が不審顔。詞アノ魚釣に行くに金が入るかえ。ヤそりや何いふのぢや。テモお前てこつる金が有るなら戻していけと言はしやんすぢやないかいな。わしや又沙魚釣るやうに

しらさ海老で釣るかと思へば。金で釣るてこといふ魚はどんな魚でござんすぞ。エ、すむはうの噺に似合はぬきつ太郎四郎ぢや。金を餌にする魚があつてたまる物か。コレてこつるといふのは。れこそさの事ぢやわいの此方も粹方の女房なら。ちつとてんしよでも覺えさうな物ぢやがなア。今の世界に青二引かぬ者と。お染久松語らぬ者は疫病を受取るといひの。こんな事いふ間はない。銀十郎／＼起きて來んかい怖い事は何もない。高が借錢乞に來たのぢや。起きざ起しに行くぞよと。地わめくを宥める女房も持て扱うてフシ見えと。地いふに女房が不審顔。詞アノ魚釣に行くに金が入るかえ。ヤそりや何いふのぢや。テモお前てこつる金が有るなら戻していけと言はしやんすぢやないかいな。わしや又沙魚釣るやうに

さうと約束の通り受取りに來たのぢや。サア今渡せ受取らう。いやと言や此證文で直に代官所へ願ひ申すが。わりや出所へは出られぬ身分ぢや有らうがなと。地病づかすは疫病の神と名の付くフシ奇特なり。詞ハデやかまし

い日暮迄は今日の中大方工面も出來て

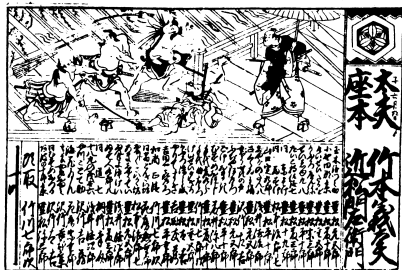


の波阿城傾」

ある。是から直に先へ行て才覺して来る程に。大儀ながら晩方來いと。地聞きてはさすが強うもえ言はず。詞ハテ晩方迄なりや待つてやろ。其代りに暮六つをこんと打つと直に受取りに来る程に。其時に成つてからならぬなどと。ねだ切りはつた所で三どつば打たれたやうに。がつくりさすのぢやないかよ。今度違へば直に代官。サア呑込んでゐる。も一度行たら慥に工面の出来る金。汝もいぬなら連れだとかいと。言ひつゝ出づる袂をひかへ。詞その様に慥に言うて何ぞ當の有る事か。又間違へば氣の毒な。地まあ二三日も言延て。詞イヤならぬ二三日の事は扱置き半時も待つ事ならぬ。サア／＼來いとせり立つる。地武太六伴ひ十郎兵衛フシ我が家を出でて行く跡へ。地引違うて息せきと飛脚と見えて草鞋がけ。

内を覗いて。詞申しこの狀届けますと。地投出す一通。地女房取上げ上書に。詞銀十郎殿へ急用と。地書いたばかりで下方迄なりや待つてやろ。其代りに暮六つをこんと打つと直に受取りに来る程に。其時に成つてからならぬなどと。ねだ切りはつた所で三どつば打たれたやうに。がつくりさすのぢやないかよ。今度違へば直に代官。サア呑込んでゐる。も一度行たら慥に工面の出来る金。汝もいぬなら連れだとかいと。言ひつゝ出づる袂をひかへ。詞その様に慥に言うて何ぞ當の有る事か。又間違へば氣の毒な。地まあ二三日も言延て。詞イヤならぬ二三日の事は扱置き半時も待つ事ならぬ。サア／＼來いとせり立つる。地武太六伴ひ十郎兵衛フシ我が家を出でて行く跡へ。地引違うて息せきと飛脚と見えて草鞋がけ。

されましたが。内かたへ来る狀かな。地と念を入れるれば。詞ア、成程々々。下の名はなけれども。上書の手は慥かにここに見知りがございます。置いて去んで下さんせ。夫も今は留守なれば。歸られ次第見せませう。マアはいつて煙草でも。ア、イエ／＼。まだ外へ届ける狀。急用なればもうお暇。お返事あれば跡からと。いひ捨て出づる町飛脚オクリもと來し。へ道へ立歸る。地フシ跡打眺め女房が。心がかりと封押切り。讀む度毎に驚く胸。詞ヤアコリヤコレ夫銀十郎殿をはじめ。仲間の衆へも吟味



「附 番 初 戸 鳴

所。我とても女房の身。殊に街の同類
なれば。罪科のがれぬ夫婦が命。今更
驚く氣はなけれど。一合取つても侍
の家に生れた十郎兵衛殿。盜賊街とな
り果てしも國次の刀詮議の爲。重い忠
義に輕い命。捨てるは覺悟といひなが
ら。肝心のその刀。有所も知れぬそ
の内に。若しこの事が顯れては。是ま
で豈せし夫の忠義。皆無駄ことなる
のみか。死んだ跡まで盜賊に。名を穢
すのがエ、口惜しい。盜み街も身慾
にせぬ。女夫が誠を天道も憐みあつ
て國次の。刀の詮議済むまでの。夫の
命助けてたべと。心の内に神佛フシ誓
ひは。重き觀世音。願禮補陀落や。岸
打つ波は。三熊野の。那智のお山に。
響く瀧津瀬。地年はやうくとをくく
の。小オリ道を。かけたる笈摺に。同
行二人と記せしは。一人は大悲のかけ
頼む。明故郷をはるく。こゝに紀三
井寺。花の都も。近くなるらん。調順
禮に御報謝。地テモしをらしい順禮衆。詞下
訛り。報謝進ぜうと。地盆に精米の
志。詞アイく有難うござりますと。
娘の子。定めて連衆は親御達。國はい
づくと尋ねられ。詞アイ。國は阿波の
徳島でござります。ム、何ちや徳島。
さつてもそれはマア懐しい。わしが生
れも阿波の徳島。そして父様や母様と。
一所に順禮さんすのか。イエく。そ
の父様や母様に逢ひたさ故。それでわ
し一人。西國するのでござります。地
と聞いてどうやら氣にかゝる。お弓は
猶も傍に寄り。詞ム、父様や母様に逢
ひたさに西國するとは。どうした譯
やそれが聞きたい。マアその親達の名
は何といふぞいの。アイ。どうした譯
ぢや知らぬが。三つの年に。父様や母
様もわしを祖母様に預けて。どこへや
ら往かしやんしたげな。それでわたし
は。祖母様の世話になつて居たけれど。
とうぞ父様や母様に逢ひたい。顔が見
たい。それで方々と。尋ねて歩くので
ござります。父様の名は阿波の十郎兵
衛。母様はお弓と申しますと。地聞い
て恠りお弓は取付き。詞コレくく。
アノ父様は十郎兵衛。母様はお弓。三
つの年別れて。祖母様に育てられて居
たとは。地疑ひもない我が娘と。見れ
ば見る程稚顔。見覚えのある額の黒子。
ヤレ我が子かなつかしやと言はんとせ
しが。イヤフシ待て暫し。地夫婦は今
元より覺悟の身なれど
親子と言はゞこの子に迄。どんな
憂目がかゝらうやら。それを思へばな

ま中に。名乗立てして憂目を見んより。と逢はれまいかと思へば。それが悲しうござんすと。泣いじやくりする程。深い縁はなけれども。親が死んだりが先立つたり。思ふ様にならぬ程。思ひ廻せば去なすが爲と。調オ、身にも命にも代へて。可愛子を振捨て。國を立退く親御の心。マよくゝの事であらう程に。むごい親と必ずゝ。恨まぬがよいぞや。イエゝゝ勿体ない。何の恨みませう。恨む事はないけれど。小さい時別れたれば。父様や母様の顔も覚えず。餘所の子供衆が。母様に髪結うて貰うたり。夜は抱かれて寝やしやんすを見ると。調わしも母様があるなら。あの様に髪結うて。貰はうものと羨しうござんす。

調どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつ逢ひ度いと。調わつと泣出す娘より。と逢はれまいかと思へば。それが悲しうござんすと。泣いじやくりする程。深い縁はなけれども。親が死んだりが先立つたり。思ふ様にならぬ程。思ひ廻せば去なすが爲と。調オ、身にも命にも代へて。可愛子を振捨て。國を立退く親御の心。マよくゝの事であらう程に。むごい親と必ずゝ。恨まぬがよいぞや。イエゝゝ勿体ない。何の恨みませう。恨む事はないけれど。小さい時別れたれば。父様や母様の顔も覚えず。餘所の子供衆が。母様に髪結うて貰うたり。夜は抱かれて寝やしやんすを見ると。調わしも母様があるなら。あの様に髪結うて。貰はうものと羨しうござんす。

親達の。尋ねて行かしやるを。待つて居

るのがよいぞやと。有^あるべき^{べき}に賺^あすを聞^き分^わう國へ去にや。必ず／＼煩^{わづ}うてばした角^{かく}長の海山越え艱難^{がんなん}して。あこがれ詠^よけて。アイ／＼忝^{かたじけな}なうござります。もんなど。銀^{ぎん}を渡せば押戻し。お前が其様にいうて。泣いて下さりましようござんすれど。銀は小判といふ物を。たとと持つて居ります。そんなりや泣く／＼立つを引きとめ。無^む理^りに持^もどうでも是はわしが志と。ば親故路頭^{おやふかど}に立たすかと其儘そこに。お前のお傍にいつ迄も。私を置いて下さりませ。エ、悲しい事をいひ出したして。フシ塵打拂ひ。どう思ひ諦めても。今別れては又逢ふも子の様に思うて。爰に置きたい。去^さコレま一度顔をと。見^みれ事はならぬ身の上。たとへ難儀がか、なしとむないと様々思ひ廻せども。爰は見る程胸せまり。離^{はな}れ。難^{がた}なき愛き^あらばかれ。又その時は夫の思案。程に置いてはどうも爲にならぬ事がある。思ひそれと。知らねど誠の血筋。名残は行くまい追付いて。連れて戻らうさに依つて。それで無情なう去なすのちら。父様や母様に。逢はれる事ぞ逢は親子の別れ道跡を。慕^もうて。三更尋ねや程に。聞分けて去んだがよいぞやと。地いひつゝ内へ針箱の底を探してしてたべ。南無大悲の觀音様。順父行く。フシ既に其日も。我が家へ戻る十郎兵衛豆板^{まめい}の。まめなを悦ぶ饒別^{にぎはな}と。フシ紙母の恵みも深き粉川寺。佛の誓ひ頼も工面も引違ひ。我が家へ戻る十郎兵衛に包んで持つて出で。コレ何ぼ一人しきかな。泣く／＼。別れ。行く跡がフシ順禮の子の手を引いて。女房旅でも。たとと錢さへやりや泊める。を見送り／＼仲上り。コレ娘ま一ども。戻つたぞと。内へ遣入つて見僅なれども志。此銀を路銀^{ろぎん}にして。早度こちら向いたも／＼いなう。折^ち廻し／＼。詞コリヤ日暮まぎれに火も

燈さず。どこへ往た。地とつぶやきく
 行燈ともし煙草盆。提げてどつさり
 フシ高胡座。調コレそこな子。爰へお
 ちや。今戻る道筋を。ソレ乞食どもが
 寄集り。わが身を剃いで銀取らうとぬ
 かして居るを聞いた故。それでおれが
 連れて戻つたが。わが身や銀でも持つ
 て居るか。アイ餘所の小母様に貰うて
 持つて居ます。ム、何がそんな事を。
 悪者どもが頑張つて。オ、危ない事
 く。そして其銀はどれ程ある。ドレ
 小父に見しや。アイ是程ござんすと。
 地フシ貰うた銀を差出せば。調ム、コリ
 ヤ小玉が五十匁ばかり。モウ外に銀は
 ないか。イエまだ小判といふ物がたんと
 とござんす。何ちや小判がたんとある。
 アノ小判が。テモマアそれはよい物を
 持つて居やるの。コレ此あたりは用心
 が悪いに依つて。其様に銀持つて居る

と。今の様に人に取られてしまふ。ド
 小父が預つてやらう。爰へ出しやと。
 武太六に約束の足しにもなるかと心
 の工面。欺しかくれど合點せず。調イ
 日せぬ内。ちやつと小父に預けて置き
 と。今の様に人に取られてしまふ。ド
 やる事なりませんと。地大事にする程
 猶見たく。嚇して見んと目を瞞らし。
 其様に隠すと爲にならぬぞよ。痛い
 エくこの小判の財布には。大事の物や。それでも大事の銀ちやもの。サア
 が包んである程に。人に見せなと祖母。大事の銀ちやによつて。持つて居ると
 様が言はしやんしたに依つて。誰にも爲にならぬ。片意地いはすと預けて置



「しろこるつお」

きやと。地いふ程怖がる子供心。こんな所に居ることやと。逃出づる首筋引、掴めば。詞アレ怖い／＼と泣出す。

コリヤ喧ましい。喧ましい。近所へ聞える。聲が高いと。地口へ手を當て。詞コレ

怖い事はない。有様はわしも。ちつと銀の入ることがあつての。何ほどあ

るか知らねども。二三日預けてたもや。其内には又拵へて戻さう程に。まあそ

れ迄はこちの内に。ゆるりつと逗留しや。又觀音様へも小父が連れて参る。ヨ

よい子ぢや。聞分けてサアちやつと貸してたもと。兩手放せばがつくりと。

フシそこへ其儘倒るゝ娘。詞コリヤ／＼何とした何とした。どうしたと。地言

へども更に物言はず。息も通はぬ即死の有様。詞ヤ南無三寶。コリヤ／＼日

がまうたか。コリヤ順禮の娘やいと。地呼生け／＼口おし明け。詞こりや氣

付けも水もモウ叶はぬ。ホイ。地はつとばかりに俄の敗亡。詞エ、聲立てさ

せじと口へ手を當てたが。思はず息を止め。それで死んだか。ハア、コリヤマ

ア不便と。地ばかり呆れ。フシ果てたる折からに。地表へ聞ゆる足音は。女房

ならんと蒲團で死骸つゝみ傳ひを息せきとフシ戻るお弓が。詞オ、こちの人

戻つてか。サア／＼ちやつと往て尋ねて／＼と。せき切る女房。ヤイ白痴者。

跡先もいはず尋ねてとは。何を尋ねて。サアお前の留守へ國に残した娘の

お鶴が。不思議と爰へ來たわいの。ヤ何ちや娘が來たとは。そりや母者人と

一所にか。どうして來たぞ。イエ／＼。お鶴一人でござんする。様子を言へば

長い事。不思議に娘と知つた故。飛付く様に思ふたれどな。悲しい事はお前

知れぬ身の罪科を。何にも知らぬ娘に迄。共に難儀をかけうかと。わざと親子の名乗りもせず。氣強う言うて此内

を。去なしとは去なしだが。跡で思へば思ふ程。どうも捨て置かれぬ故。

直ぐに跡から尋ねに往たれど。影も形も知れぬ故。お前と手分けて尋ねう

と思つて戻つた。サアちやつと往て尋ねてと。地聞くや聞かずに。詞ヤイ白

痴め。どんな事があるとして。おれにも知らさず追ひ去なすとは。鬼でもそん

な胸慾な事はせぬわい。イヤ斯ういうては居られぬと。地駈出でしが。詞コ

リヤ／＼。そして幾つばかりで。どんな着物着てゐるぞ。知れた事年は九つ。

中形の振袖に。箆掛けて。何ちやアノ箆掛けて。アイ。箆招も二親のある

子ぢやに依つて。兩方は西染。アノ茜染に中形。アイ。ホイ。地はつと肝に

焼鐵刺さるゝ心地。詞エ、コレ隙が入

と。餘所の様に思うたが。それが娘で

る程心が済まぬ。お前は跡からわしや

あつたとは。物の報い因縁事。コリ

先へと。地言捨て駈出すお弓をとどめ。

詞ヤアコレコリヤ娘は死んで居る。ど

詞コリヤモウ尋ねずとよしにせい。娘

に涙も出す立つたり居たり夫の傍。詞

は疾うから戻つて居る。エ、戻つてゐ

アノ娘はド、どうして死んだ。お前

とは。そりやどこに。ソレその蒲

様子知つてぢやあらう。サア言うて聞

團の内に。よう寝入つて居るわいと。

かして／＼と。地氣取上す有様を。

地いふに不審も立つ納の。蒲團を明け

見るに皮肉も離るゝせつなさ。詞ホ、

て顔見るより。詞オ、ほんとに娘ぢや。

道理ぢや尤もぢや。様子と言うたら因

オ、嬉しや／＼。お前もこんな事なら

果づく。さつきに内へ戻る道。其娘が

疾うからさうと言うたがよい。人に息

銀を持つて居るを。非人どもがよう知

急い揉まして。地エ、暗ましやんせと。

つて。取るの剣ぐのと聞いた故。可愛

恨みながらもッシ氣はいそ／＼。詞何と

さうにと連れて戻り。様子を聞けば銀

まあ見やしやんしたか。大きく成らう

もある故。少々なりとも武太六に返す

がな。そしてマア滅相な。いかに草臥

工面。二三口貸してくれと。譯を言へ

れて居ればとて。からげも下さず。爰

ども子供の事。聲山立て、泣きわめく。

摺もかけたなり。ドレ／＼。帯解いて

近所の聞えが氣の毒さに。つい口を押

ゆつくりと。久しぶりで母が添乳と。

さへたが。息が詰つてソレ其様に死ん

地爰摺はづし帯とく／＼。見れば手足

で仕舞うた。エ、いぢらしい事をした

レ堪忍してたもや堪忍してたもや。

地

年は往かではるゝの道を厭はず苦勞して。親を尋ねる孝行娘。親は。それに引替へてむごう無情う追つ返し。まだ其上に親の手で殺すといふはマア何事ぞ。別れに言やつた順禮歌。父母の恵みも深き粉川寺。どこに是が恵みが深い。こんなむごい親々が廣い唐にも天竺にも一人とあるものかと。死骸の顔に我が顔を。押當てゝ。抱きしめ。フシ泣涕。こがれ伏沈む。銀十郎も後悔のステテ涙五臓を絞らしが。言うて返らぬ事ながら。銀のある事得知らずば斯ういふ事はあるまいもの。銀が敵と死骸の懷。探して財布取出し。中改むれば金三兩。調コリヤコレ僅かな金。いかい事もある様に。思ひ違ひがやつぱり因果と。出す財布の内。調十郎兵衛殿夫婦の衆へ。ム、コレ。書いたは正しく母の筆

と。封押切つて讀む。國を立退かれし其日より。案じ暮すは互に親子の愛著にて。浮世の中の習ひなれば。くどう筆には記さず。第一に申したきは。何時ぞや申越されし國次の刀。郡兵衛に心をつけて密かに手筋を求め。詮議致し。即ち郡兵衛盜取り。サテコソナ。所持いたし。段。慥かに聞出し。早速詮議と思ひ。共。女の身で。早中。の事を仕出し。却て妨げになつてはと差扣へ。其元の有家を尋ね詮議させんと。孫のお鶴諸共に。旅の用意致し。内。遁れぬ無常の風に誘はれ。力及ばず身まかり。故書殘し申。ヤ。スリヤ母人は。お果てなされたかいな。一通届き次第早々國へ立歸り。國次の刀を取戻し。立身出世を草葉の對面の後縫はせ御覽なされ。夫婦ながへ。ム、コレ。書いたは正しく母の筆

あの郡兵衛めか所爲で。エ、母人の御最期。寢急至極と言ひながら。有難きは刀の有所。是と申すも母の御恩。ハア、忝なし嬉しやと。歎きの中の悦びを。聞いてお弓も顔を上げ。調お袋様の御最期一日の介抱も。せず別るゝ涙ながら。調外に申す事はなく。共。孤兒となりし孫が事。是のみ黄泉の障りに。神佛の恵みにて恙なう。其元に育て給はるべく。それは。器用者にて。物もよう書き琴も弾く。第一に縫物が手利にて。縮緬緞子の衣裝まで。手際よう仕立て。教へ置き。是ばかりは妾が自慢に。夫婦な

母様の冥加ない。常々から虫持にて桑い。何百人取巻くとも。刀を我が手にくを。われ組止めんと追つ取巻き。差山がよう利きゆ故。たとと持たせ置き入れん内は。切つてく切抜けると。付ける松明の火花を散らして。三葉挑みまゝ。もし虫でも發つたならば。此嬢の死骸を引拵へ。泣入る女房を引みしが。地十郎兵衛一人に切捲られ。子の年の數程御吞ましなさるべくゆ。立てくオクリ一間の。へ内へ入りにけ。地十郎兵衛の子のちりくに。地逃行くどうもく大切に。育て頼み上げる。地程なく來る捕手の大勢。詞ヤア盗賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛。此所に隠れ住むよし。武太六が訴に依つて召捕りに向うたり。尋常に何としたソリヤ氣遣ひござんせぬ。コと又も正體なかりけり。詞ヤアいつ迄繩かゝれと。地聲々いへど晋せぬは。地此通りと死骸の上。落ちる戸障言うても盡きせぬ歎き。刀の有所知れる上は。かの地へ下り詮議せんと。地す打ちこぼて。人數は半分裏道へ廻れ子積みかさね。松明の火を差付けて。勇む折から表の方。俄に騒ぐ人聲足音。くといふ下家。天井障子佛壇戸棚。人手に渡さぬ火葬の營み。南無阿彌陀佛と合はす手も別れ。三更別れて立出十郎兵衛きつと心付き。コリヤく女粉もなく碎く壁下地隙間も洩らさぬ大房。詞あの物音は必定捕手に違ひな勢の。捕手相手に十郎兵衛が大章に働